

病院を舞台にしたテレビドラマシリーズで、主人公の外科医が口にする「私、失敗しないので…」の一言はお馴染みの決め台詞としてよく知られています。

しかし、これはドラマの中での話であって、人は失敗をするものです。事の大小は違っても、日々の生活の中で何一つ失敗をしないという人はいないでしょう。さらには、人はそうした失敗を糧として、自らの生活を改善し、向上させてきたと言っても過言ではないはずです。

「失敗を教訓にする」という言い方は、よく聞かれますが、そもそも「教訓」とは辞書には、「教えさとすこと。また、その内容・言葉」と記されています。つまり、「失敗」そのものが「教訓」ではなく、先生(師)に見立てた「失敗」から何かを学ぶ姿勢が大切なのです。そうした姿勢が伴うとき、その「失敗」は自らに何かを教えてくれる「教訓」となるのです。

「失敗」を向上のための「教訓」とするこ

とが出来るかどうかは、「失敗」したときの対処の方法と自身の心の向け方に留意すべき点があります。

まず、対処の方法として「言い訳をしない」ということが挙げられます。もちろん「失敗」をしているわけですから、その「失敗」によって迷惑をかけた相手の存在があります。その人に素直に「詫げる」ことは必須ですが、いくら謝られても、その前置きにあれこれと理由が付いているのでは誠意も半減といったところでしょう。



失敗にこそ教訓あり

この「言い訳」という行為は「こうした理由があったので失敗しました。ですから私の落ち度ではないのです」と言っていることになりません。つまり、その「失敗」そのものを自分のこととして真正面から受け切っている状態にはないのです。このような姿勢では「失敗」の中にある「教訓」に気づくことは難しく、「失敗」を自身の向上につなげることは出来ません。

「失敗」に対する心の向け方については、倫理運動の創始者・丸山敏雄が次のように述べています。

又最初失敗すること、これは尊い月謝である。喜んで又改めてとりかかると、いつか大きい成功の栄冠がかがやく

『万人幸福の葉』第十二条

くよくよして、しょんぼりしていても「失敗」が帳消しになるものでもありません。ましてや、その「失敗」を取り返すには一刻の猶予もないはずです。

そうであるならば、最初から上手いけば良かったけれど、この失敗でもっと大きな成果が得られるかもしれない」と、自身を成長させてくれるために起こった出来事なのだと期待感をもって「喜んで」受けるのが、心の向け方としては適切です。

誰しも「失敗」は避けたいものであり、進んで「失敗」しようとするなどありません。人類が「失敗」を糧に進歩してきたように、私たちも「失敗」を「教訓」として、次の世代に良いものを残していくという姿勢を貫きたいものです。